

13. マッチングのアドバイス

適正譲渡では、譲渡希望者のライフスタイルや家族構成にあわせてふさわしい動物をマッチングすることが大切です。犬の場合ほど難しく捉える必要はありませんが、人と猫の双方が幸せに暮らせるようにアドバイスしましょう。

■ 留守がちな家庭が、子猫を希望する場合には・・・

子猫はとにかくエネルギーで、その遊び欲求を満たすことができないと、問題行動（いたずらや人の体へのじゃれ噛み、過剰な興奮など）につながることをまずしっかりと伝えましょう。運動不足が発育に影響を与えることもあります。譲渡会などでは子猫は緊張し普段の活発な様子を見せないことが多いため「おとなしいし大丈夫だろう」と思って連れ帰ったところ、だんだんと家に慣れると活発になり、あまりの活発さに辟易してしまう、ということもありますから、普段の様子を動画などに撮っておいてみてもらうのもいいでしょう。



そのうえで、夫婦共働きや一人暮らしなど留守番時間が長い家庭には月齢が同じくらいの猫（きょうだいや、相性の良い猫など）二匹での譲渡を勧めるのもひとつの方法です。忙しく留守がちで子猫の遊び欲求に人間が付き合うことが難しそうなら、二匹一緒に飼育することで猫同士で遊んでエネルギーの発散をすることができ、また室内でも退屈をせずに暮らせるでしょう。ただし同性同士を譲渡するか、不妊去勢手術をしてから譲渡する・すぐにしてもらえる確約をとる（譲渡時に動物病院の予約を取ってもらうくらいの方が安心）ことが必須条件です。また、子猫ほど活発でなく、性質が安定している成猫を勧めるのもいいでしょう。

■ 高齢者の家庭には・・・

犬に比べて猫は高齢者でも比較的飼いやすいペットです。猫の寿命を伝え、病気や入院などで将来面倒が見られなくなった時に備えて後見人的存在（近くに住んでいる家族や知り合いなど）を明らかにしてもらうなど条件は必要ですが、一概に高齢者だけの家庭には譲渡できないと決めつけなくてもいいでしょう。子猫よりも人懐っこく安定した性質の成猫のほうが飼いやすいことを伝えて、実際に穏やかで、人に擦り寄ってくるような愛想のいい成猫にも会ってもらうといいでしょう。



■ 小さな子どものいる家庭には・・・

子どもの年齢や性格にもよりますが、シャイなタイプの猫は子どもの存在をストレスに感じてしまうことが多いので、活発な明るいタイプの猫を勧めましょう。そして譲渡の際には優しくていねいに猫を扱う事をしっかりとお子さん自身に伝え指導します。



■ 先住猫がいる家庭には・・・

まず、先住猫に不妊去勢手術が施されているかを証明書などで確認します。その上で先住猫の性格を聞きましょう。先住猫が人に対してではなく猫に対してシャイで社会期に他の猫との接触が少なかったようなら、譲渡を見合わせた方がよいかもしれません。先住猫が新しい猫を受け入れられず、ストレスで病気になる可能性もあります。どうしても、という場合にはトライアル期間を設けて（一週間程度）関係を見るのも一つの方法でしょう。また、新しく入ってくるのが子猫の場合、先住猫も受け入れやすい場合が多いようです。



■ 長毛種の猫を希望されたら・・・

猫は自分でグルーミングするから人の手は必要ないと考えている人も多いので、長毛、中毛の猫の場合は人間がこまめにブラッシングをしてやる必要があることを伝えましょう。そうしなければあっという間に毛玉になります。ブラッシングを受け入れる猫にするためには、子猫の頃から体に触られることに慣らし、ブラシに慣らす必要があります。子猫が食事をしている間に、そっとブラシをいれてみることから始めるよう、指導しましょう。（食事を邪魔されるのを嫌う猫の場合は眠そうで穏やかな時間にごく短い時間だけ優しくブラッシングすることから始めましょう。）



■ 成猫の良い点も伝えましょう・・・

人懐っこい穏やかな性質の成猫がいるなら、子猫を希望している方にもぜひ会ってもらいましょう。どんな人にもなつき、センター収容中に扱いやすい猫であれば、新しい家庭に馴染むのにもさほど時間は、かからないでしょう。擦り寄ってくる姿に触れれば希望者の気持ちも傾くかもしれません。

なお、成猫に関しては「トライアル期間」（1週間程度）を設けているところもあります。穏やかに家庭に馴染む様子を見て「このまま譲渡に」と希望する人も多いようです。



■ 猫好きのこだわりを大事に・・・

猫を飼いたい人は、猫の容姿に関するこだわりが強い場合が多いようです。たとえば代々キジトラを飼っていたので次もキジトラがいい、尻尾が曲がっているのがいい、足袋をはいている（足先だけ白い）のがいい、など千差万別です。また地域によっては、黒猫は縁起がいいとして望まれる場合（あるいはその逆の場合も）あります。そうした要望をよく聞き取り、希望する容姿の猫が入ってきたらすぐに連絡する、譲渡会にはさまざまな容姿の猫をそろえておくなどしましょう。子猫の数が多く選択をしなければならない場合、同じような容姿の子猫ばかりにならないように、という基準で行っている自治体もあります。



「あなたに合う猫は？～ASPCAのマッチングプログラム」

アメリカの動物保護団体「ASPCA（アメリカ動物虐待防止協会）」は、シェルターに収容されている譲渡候補動物と譲渡希望者とのマッチングをよりよいものとして飼育放棄やリターンを防ぐために、行動学者やシェルタースタッフとともにMYM（Meet Your Match）というマッチングプログラムを作りました。現在このプログラムは全米の多くのシェルターに導入され、譲渡後のリターン率が減少しているということです。猫の場合のプログラムを紹介しましょう。

■ 譲渡候補猫の気質チェック

候補猫は、通常のケアのなかでスタッフが気づいたこと（データカードに記入）と、「Feline-ality」と呼ばれる気質チェックテストの結果から、大きく3つのカラー＜グリーン・オレンジ・パープル＞の気質に分類されます。

気質を判断する際のポイント

「勇敢性～新しい刺激などに対する反応」

「社交性～人に対する反応が友好的・社会的であるか」

3つのカラーイメージ（カラーごとにさらに「社交性」というポイントで3種類に分類）

グリーン 勇敢性が高く新しい刺激に順応しやすいタイプ

パープル 勇敢性が低く慎重なタイプ

オレンジ その中間でノーマルなタイプ

Feline-ality テスト項目（15分ほどでできる内容になっています）

- ①猫に近づいて反応を見る
- ②猫を初めての部屋に連れてきて反応を見る
- ③声をかけ握った手を近づけて反応を見る
- ④開いた手を近づけて反応を見る
- ⑤なでて反応を見る
- ⑥遊んで反応を見る
- ⑦抱いたときの反応を見る
- ⑧少々強引な触れ合い（強めに撫でる、しっぽを掴むなど）をしたときの反応を見る

■ 譲渡希望者の調査

猫の譲渡を希望する方には「16の質問アンケート」に答えてもらい、さらに飼育環境やどんな猫を希望するかを聞き取ります。

質問例

どんな環境で暮らしたいか？（図書館のような雰囲気・穏便に・毎日がカーニバルから選択）

猫と追いかけて遊みたいか？ / 猫には来客とも触れ合って欲しいか？

猫には子供と仲良くしてほしいか？ / お留守番の時間は？

抱っこ好きの猫がいいか？ / 活発な猫がいいか？

ニャーニャーおしゃべり好きな猫がいいか？ / 猫に一番求めることは何か？

■ マッチングのアドバイス

希望者の回答から、その方の生活にふさわしい猫のタイプが「グリーン・オレンジ・パープル」のどのカラーが示されます。譲渡候補猫のいる猫舎では、それぞれの猫のケージが色分けされているので、希望者はその色も参考にしながら、猫を見ていきます。スタッフはこのプログラムの判断を希望者に押し付けることはしませんが、衝動的に決めようとする希望者に専門家としての的確で冷静なアドバイスを行います。また猫の気質と飼い主の飼育環境を踏まえて、飼育に関するアドバイスも細かく行えるということです。

参考：<http://www.asPCA.org/adoption/meet-your-match/>

団体譲渡・広域譲渡

■ 団体譲渡

多数収容される猫の譲渡を進めるために、民間団体との連携で「団体譲渡」（民間団体や個人に譲渡し、そこから新しい飼い主を見つけてもらう方法）を行う自治体が増えています。自治体への調査において、猫の譲渡を行っている71自治体のうち、53自治体で団体譲渡を行っていることがわかりました。民間団体等の力を借りることで譲渡がより進むのは明らかであり、例えば東京都の統計を見ると、平成13年、登録団体が「1」だったときの猫の譲渡率はわずか1%。団体数が「11」に増えた平成23年には、譲渡率が14%にまで上昇しています。これまでの増加傾向は団体譲渡に寄与するところが大きいと、東京都では考えています。

団体譲渡を進めるメリット

- ・より多くの猫を譲渡できる
- ・離乳前の猫や病気の猫（治療により予後良好と判断されるもの）も手厚くケアしたのち一般飼い主に譲渡してもらえる
- ・不妊去勢手術の実施率はほぼ100%（団体が手術を行ってから一般に譲渡される）

団体と連携する際のポイント

- ・連携の条件を定めるなど、団体には遵守事項を遵守してもらう（トラブルの防止）
- ・団体には活動報告を義務付け、活動状況を把握する

■ 広域譲渡

自治体間で譲渡の協力をする試みも始まっています。

猫の例ではありませんが、子犬がたくさん収容され希望者が少なく困っている場合、ほとんど子犬が収容されず譲渡希望者が待機している他の自治体の子犬を譲渡し、その自治体から譲渡してもらうという、自治体同士の連携です。

また一般譲渡の際に、県外・市外の方に猫を譲渡する取り組みもあります。行政から一般の方へ譲渡される場合、管轄内に住む方への譲渡を原則としている場合が多いですが、希望者がいない時には対象を広げるという考え方です。県外・市外に活動拠点を置く団体と連携することで、より広い対象に譲渡の可能性を広げている自治体もあります。

事例

岡崎市＆名古屋市

自治体間の広域譲渡

岡崎市動物総合センター（Animo）が9頭の子犬を収容した際に、譲渡希望者の見込みが少なかったため、名古屋市動物愛護センターに受け入れを打診したことがきっかけで、自治体間の広域譲渡が行われました。名古屋市動物愛護センターでは譲渡希望者リストに子犬の希望者がいて譲渡できる可能性が高いと判断し、岡崎市（同じ愛知県内）まで子犬を見にいき、健康状態も問題ないことを確認しました。岡崎市動物総合センターで検便・駆虫薬投与・ワクチン接種の後、1週間後に名古屋市動物愛護センターに移送されました。その後名古屋市から一般家庭に譲渡されたということです。

この事例がうまく進んだ背景には、

- ①日頃から情報交換し合える関係ができていた
- ②譲り受ける自治体で譲渡の可能性が高かった
- ③感染症についての配慮（ワクチン接種後の移送）
- ④費用負担の確認（一回目ワクチン費用は岡崎市が負担）
- ⑤センター長同士の合意 などがありました。

